

# 台湾の檳榔文化<sup>ピンロウ</sup>にみる都市の戦略

カール・ハインツ・クロープフ

山本直樹訳

台湾では、檳榔（噛むと軽い覚醒作用がある）を販売するための商業主義によって、完全に新しい簡易的建築スタイルを持った檳榔売りの露店が生み出されている。この現代のかつしんぷルで移動可能な店舗には、客の目を引くために着飾った「檳榔美人」が配置され、台湾中のいたるところで出現しつつある。オーストリア人の芸術家・映画作家であるカール・ハインツ・クロープフは、現在この現象をテーマにした長編映画『ディスプレイの方法』をデジタルビデオで撮影中であり、以下に示すのは作者によるシノプシスである。

## インフォーマル・セクター（非公式的産業分野）

不景気と同じように、著しい経済成長⇨躍進もまた、それぞれの文化的コンテクストに従いながら、新しい都市空間や生

活と生存に関する新たな形式を発展させる。人口の大半が都市部で生活を送っているような社会である台湾では、新たな空間や仕事を供給する分野がインフォーマル・セクターから生じることが多かったが、これは二十世紀後半における極端に急速な経済発展の結果であり、またそういった情勢をうまく切り抜ける必要性にもとづくものであった。

この時期、増大する生産物とそれを保管する空間の必要性のために容認された状況のもとで、既存の建物はあらゆる方向へ非合法的に拡張していった。突如として居間が工場となり、「工場としての家庭」というフレーズが生産促進のスローガンとされた。そしてあらゆるものを可能ながぎり売るために、移動可能で簡便な建造物が出現したのである。

そのなかで最も文化的に興味深く、独自のものとしてあるのは、檳榔の新たな販売戦略から発展してきた分野であろう。これはさまざまな地域的、グローバル的な影響によって創出され、

今や新たに独立した文化となつてゐる。<sup>インドネシア・トルネド</sup>

## 植える、売る、噛む

最新の研究によると、檳榔を噛む習慣は、数千年前に台湾の南西部にいた山岳民族にまで遡ることができるといふ。十七世紀に中国南部から最初の漢民族の侵入が行われると、今度は漢民族がこの因習を取り入れて、継続させてゆくことになった。今日、檳榔の木の栽培（たいていの場合違法であるが）は、山岳地帯でさかんに行われている。また、それにより生じる檳榔の市場取引は、国家の経済的要因ともなつてゐるのである。

檳榔を消費するのは、長距離のトラック運転手とか経済的階級の低い男性がほとんどであつて、彼らはそれぞれ一日に数ダース単位で口にする。これを噛むと、中枢神経が興奮して体温の上昇を感じ、催淫効果や軽く酔払つたような気分を味わうことができる。が、その一方で、常習的な摂取は口腔癌を引き起こす原因になるともいわれている。

檳榔の木の栽培と販売と消費は、台湾の街頭に各々の活路を見出している。台湾全域でみると、檳榔の売店は大体十万箇所くらいあるが、普通それらは往來の激しい道路や交差点沿い、高速道路の出入口付近などに存在している。色鮮やかな蛍光灯で作られたクジャクの看板や、いくつもの点滅するライトのお

かげで、トラック運転手たちは遠くからでも売店の存在を認識することができる。その看板は、他のややこしく密集した掲示板や建物の入口を覆い隠す広告板を圧倒しており、さらに売店に近づけば近づくほど、街頭の空間に占めるイルミネーションの割合が増えてくる。全体が幸福そうな色に塗られた、高床式で移動可能なガラス製の箱（もしくはコンテナ）は、床から天井までがショーウィンドになっていて、切り出されたガラスの表面と鏡に囲まれている。そしてこの箱が、体にピタッとフィットした「制服」を身につけた若い女性たち「檳榔美人」（中国語では「檳榔西施」（西施は中国・春秋時代の美女）と呼ばれる）に空間的な構造を与えているのである。

売店の正面に車を止めると、即座にひとりの「檳榔美人」が車のところまで出てきて注文を取る。檳榔、煙草、栄養ドリンクが買えるほか、周辺の情報を尋ねることもでき、またあまり忙しくなければ、いつでももちよつとした会話を楽しむことができる。このサーヴィスでは、退屈になりがちな日常生活において、短いながらも親密な交流を持てる可能性を示す露骨な外見こそが重要なのであり、その点が争いの激しい檳榔市場で成功するための本質的な特徴となつてゐる。

## 街頭のパフォーマンス

一九七〇年代と八〇年代の都市部における建設事業と、そこからもたらされた商業輸送の大量増加による高速道路の急速な拡張にともない、地方だけでなく都市部においても、檳榔を噛む習慣が瞬く間に広まっていった。と同時に、急激に高まった空間に対する要求に応えるという理由から、既存の建物を非合法的に拡大もしくは増築するインフォーマル・セクターの成長もあつた。街頭には飯店舗や単純な仕組みの屋台があふれたが、初期の檳榔の売店はそれらと別段違いがあるわけではなかった。

しかし、一九九〇年台なかばごろから非常に競争が激しくなり、多くの檳榔商人たちは新しい販売戦略を展開させねばならなくなつた。客を惹きつける戦略はしだいに洗練されたものになつていったが、色鮮やかで点滅するライトを使ったり、生身の女性が肌を露出した服を身に纏つたりするディスプレイは、ともすれば色褪せたものとなつてしまいがちな街頭において、ある種の感覚を掻きたてるよう計算されているのである。彼女たちは毎日、自分たちが着る「コスチューム」を取り替える。看護婦、軍服、学校の制服、あるいは日本の漫画のキャラクターから借用したキャラクターなどいくつかのテーマがあり、それらが車に乗った客たちに向けて順々に提示されるのである。この現象について、台北を中心に活躍する建築家であり、「アー

バン・フラッシューズ」の主唱者でもある季鐵男チ・ティナムは、陳腐な様相を見せながらも、都市の微少なレヴェルにおける一種の戦略ともなつており、都市計画者や都市デザイナーが学ぶべきところがあると評価している。

ここではパフォーマンスの場としての街頭に備わっている可能性が、非常に繊細な方法で探求されている。彼女たちはときどき車道へと飛び出してゆき、手を振りながらダンスのような動きをして自分たちの存在を知らせる。いつてみれば彼女たちは街頭のスターなのである。普通から逸脱しているという彼女たちの自意識は、点滅するライトや大音量で流されるポップやテクノ、刺激的なコスチュームといった、ポップ・カルチャーの要素を取り入れた多彩な成果によつて支持され、かつ提示されている。この攻撃的な戦略は高い利益をあげているが、他方で頻繁に重い罰金に科せられるばかりか、交通事故の原因ともなっている。

とすれば、檳榔売りの店主たちが、姿をくまますための巧妙なシステムを急速に発展させたことは驚くにあたらないだろう。ひとつの例が、バーに据え付けられた販売ボックスであり、これは歩道から建物内へと押し込められたの一分とかからない。それ以外にも、トラックの荷台に積まれた売店などがあり、こちらは販売しようと思えばどこでも組み立てられるものなのだ。なるほど、山間部で多く見られる非合法的な栽培による土壌の浸食や、健康への被害といった他の否定的な側面もある。け

れども一旦そこから離れて、公式的な建物のあいだに存在する中間領域において、何の計画性も持たぬまま、疑似 匿名的に発生したこの現象を、空間へのダイナミックかつ創造的な介入の一例として考えてみよう。私たちがここで取り扱っているのは、自国の伝統や現在の状況、あるいは外国の影響を受けながら発展してきたひとつの文化の形式である。しかも、こう



やって交通量の多い街道に沿って点在する何千もの売店は、台湾全島を凌駕するほどのれっきとしたサーヴィス・ネットワークを形成している。そしてこのネットワークが秘めている潜在的な力こそが、また別の共同体的、文化的な発展の可能性を与えるのである。



